れている。）

普通この種の作品では、表層で語られる話自体は〝第三類の二〟の作品と同様、小説の領域に属するものではないが、たとえば漱石の『こころ』では、この表層の部分で、〝私〟と〝先生〟の交流の世界が、すでに小説の領域に属するものとして構成されている。そしてこの層の終りで〝先生〟の自殺が語られ、〝先生の遺書〟という形で、この作品の内層の世界が展開されるのである。

以上列挙してきた種々の小説の手法のうちで最も本格的で正統的なものは、むろん〝第二類〟と〝第三類の一〟のそれであろう。しかし、これらの手法によって構成された小説の持つある機構上の不自然さは、日本の作家たちには本能的に我慢ができなかったに違いない。そして、彼らがこれらの小説の様式のうち、最も平面的で不利な〝第一類の様式〟（特に私小説の様式）を多用したのも、そこに彼らが素朴な自然さを感じ取ったからではあるまいか。

研究余滴　堀河百首「霧」の歌

堀河百首題「霧」の題詠の表現の型を整理するために、歌を素材別に分類してみると、十六首の「霧」の歌のうち八首までが川霧を詠んでいる。その八首のうち五首は河川、滝などの水と縁のある素材と音、声などの聴覚的な素材と共に詠まれている。（算用数字は群書類従本の通し番号）

739 石走音はかくれず夕霧のころもの滝をたちこむれども
740 吉野川わたりもみえぬ夕霧にやなせの浪の音のみぞする
741 白波の音ばかりしてみえぬかな霧立わたる玉川の里
745 秋霧の杣山川に立ぬればくだす筏のをとのみぞする
749 川霧にわたせもみえず遠近の岸に舟よぶ声ばかりして

この五首の歌は自然現象の霧がもっている性質から、視覚をさまざまるものとして詠まれる。眼前の実景が霧によってさえぎられてしまうが、音、声は聞こえると詠んでいる。

特に739・740・741・745の四首の歌は類型的表現によって詠まれ、ころもの滝・吉野川・玉川・杣山川という川河や滝の名称と滝の音・やなせの浪の音・白波の音という聴覚的な素材を中心に詠み、霧の状態や霧のもつ静寂で渺渺としたイメージを強張させている。まさに聴覚的素材を効果的に使用し、構成的で観念的な歌の世界を創り上げている。

以上のように、「霧」を河川、滝や水と縁のある素材と共に聴覚的な素材を中心に詠むことは堀河百首の「霧」の題詠の表現の型の特徴の一つとして上げることができるだろう。

（田辺愛子）